四、習慣形成説（The Habit-Tendency Theory）
五、人間的欲求説（The Human-wants Theory）
六、一般的成長説（The Universal-Growth Theory）
七、新実験主義説（The Later Experimentalist Theory）
八、精神的自己実現説（The Spiritual-Self-Realization Theory）
九、超自然的発達説（The Supernatural-Development Theory）
十、大古典主義説（The Great-Classic Theory）
十一、社会的自己実現説（The Social-Self-Realization Theory）
十二、基礎教科説（The Basic-Subjects Theory）

アメリカの教育は二十世紀の初めにDeweyが、あらわれて以来、いわゆる進歩主義理論派に依って風びされた観があった。そこでは、学習者の経験と社会性が大きくとりあげられた。それに対し、W. C. BagleyやKandel等、教科を強調する伝統または本質派が対立し、賑やかであった。Dewey亡き今日といえども、この論争は解決したわけではない。むしろ、両派はあるいは我城に閉ぢこもり、あるいは相互に交錯した状態において、Wynneが指摘しているように新実験、精神的宗教的自己実現、大古典、または社会的自己実現等の諸説へと進展し、その止む処を知らないありさまを示している。

ところが、第二次世界大戦終了まもなく自然科学者、技術者の大量養成の必要に迫られ、物理学研究委員会（PSSC）によって、教育課程（高等学校）の再編成を余儀なくされている。ここではDeweyの業績を肯定しながらも、即ち、学校は現実の問題と取り組む生活の場だけで、足れりとせず、むしろ人類がかって夢想だにしなかった未知の世界へ突進するために、最大限の知性を駆使して、何物かを発見しようとする特殊な場なのだという。ここでは、人間性よりは学問性、社会性よりは本質的教科性が重要視される。更にこの物理学研究委員会の高等学校課程再編成の仕事は自然科学者及心理学者の手で進められ、教育専門学者、実践家は、しめ出されている。

教育学者であり、実践家である著者は「この本は、今日の教育学に影響している重要なあらゆる論説を歴史的・哲学的・心理学および社会的基盤に立って、充分な、そして綜合的な分析を試みたものである。と同時に、その結果を今日の教育課程、方法、教育行政に応用している」と述べていることによっても、彼の動機は明瞭である。

更に、彼は「教育学の基礎入門書」と副題をつけ、教職課程の重要書即ち入門書であると同時に、深い専門書であることを強く述べている。文育の社会においても教育という作用はある。なんらかの考えに基いて、その作用は進められていることも、否めない。その考えが教育原理である。そして、その原理は、その人により、その場所により、その時により進め方が異なり、また変化していくとともに習慣化即ち伝統となって伝達される。これが学説である。いかなる時代いかなる場所においても、もちいられるその学説は決して単純なものでなく、常に過去の上にたって成立しているのである。いかなる教育学説でも、短い期間に急カーブ的に出来るものでないとともに、現在をつくった、否、影響をもたらした過去を無視することは冒険であり、危険である。世界を通じ、今日程、教育ということが重要視される時代は余りない。Wynne博士のこの新著は、過去の主要教育学説の正確なたなおろし的調べであり、現在との関係を正確に把握し、今後、どうすればよいかという難問題に答える役割をしている力作である。教育を志すもの、教育という仕事にたずさわるものの見のがすことの出来ない明晰な書である。

（一九六四、二、一一）

仏教文学研究会編
仏教文学研究 (一) (二)

田中重太郎

ここにとりあげる「仏教文学研究」(一)(二)は、どちらもB6判ながら、(一)は、三一〇頁、(二)は、三七〇頁、計六八〇頁もあり、執筆者は二十名におよぶ論文集であるから、その論文名を羅列するだけで与へられた紙数に達しさうであるが、その人名と論文名との紹介にとどまっても、十分意義があると考へるので、国文科に入学して来た人人を対象としておほけなき短評を加へてしるしてみる。

まづ、第一集の目次をみると、

序　山岸　徳平　一
拈華微笑と笑拈梅花　山岸　徳平　九
遊部考　五来　重　三三
天台教学から見た源氏物語　大久保良順　五一
釈教歌考　岡崎　知子　七九
——八代集を中心に——
平家物語に於ける仏教説話について　高橋　貞一　一一九
宴曲と寺社
——宴曲はどうして鎌倉幕府下に成立したか——　外村　久江　一五三
文学・仏教・中世をめぐる問題　榎　克朗　一九一
法語　文芸　菊地　良一　二二七
絵解と本願寺聖人親鸞伝絵　福永　静哉　二五七
親鸞に関する中世の一談義本　宮崎　円遵　二七五
筆者紹介　三〇八

のやうである。下に掲げてある数字は、その論文の所在ページであるから、後の数字から前の数字をさし引くと、その論文のページ数が計算できる。たとへば、「釈教歌考」は、一一九から七九を引いた四〇ページで、十篇のうちもっとも長いものであり、序は、九から一を引いて八ページでいちばん短い量である。（なほ、一ページは、四二字一六行で六七二字である。）

さて、右にあげた十人の学者のうち、あなたが——これは、主として国文科の学生に対していふ——知ってゐる人は何人あるか。姓名だけを存じあげてゐるのが幾人で、姓名とお顔とを存じあげてゐる人が幾人、名も人もよくよく知ってゐる、交際してゐる人が幾人かとたづねられたら、どう答へるか。「一人も知らない」「全然知りません」といふ人もあるかも知れない。正直にいって、わたくしは、ここに示された十人のうち、面識があり、あるいは、話しをしたことがあるいは、教へを受けたり、したしくさせていただいてゐる学者が五人で、あとは芳名を知ってゐる人、全然知らない人である。そんなことは、どうでもよいではないかと思はれようが、決してさうではない。現にあなたが自分で書いた文を活字にしたとき無関心でゐられますか。自分にもっとも近い人が書いた文を読むとき、自分が尊敬してゐる人、自分が愛してゐる人、いや自分がちょっとでも知ってゐる人の書いたものであっても、まったく知らない人のものとは、それを読むときには、別の関心をもつであらう。それが文芸作品であるならば、好きな作家のものとさうでないものとの熱意の相違にもなるのである。

書評がとんだ脱線をしたが、もうすこし脱線をつづける。本学の国文科に学ばれる一年生にきく。ここにあげられた論文名を読んでそれがどんなことを論じたものであるが、ほぼ推察ができますか。「拈華微笑」「遊部」が読めますか。「釈教歌」「宴曲」「談義」とは、それぞれ大体どんな意味のことかわかってゐますか。右のうち「遊部」の読みかたはやや特別のものといへようが、文学・学問・宗教などの世界における専門語は、心得ておかねばなるまい。といっても、これらの大半を知らぬ人が、この論文集を座右にされることをおそれてはならないことを強く説きたい。むしろ、この論文集の一篇二篇をよく読むことによって、常識的にのみものを知ってゐることの非をわきまへられることは、こよなき益と申すべきであらう。この一冊には、歎異抄の文学性の問題も出て来るし、親鸞の伝記に関する新資料やそれらを通じて中世の国語音韻の特色さへも学べる論がある。日本文学史や国文学概論の研究にきはめてたいせつで、しかも現在の、この学界の最新最高の説が随所に説かれてゐる点もありがたいものといふべきであらう。

つぎに、第二集の目次をみる。

日蓮救母変文の源流　小川　貫弌　七
紫式部日記に描かれたる仏教
——「十一日の暁」の段の仏事——　永井　義憲　四七
「今様」に見る仏教　新間　進一　六三
新古今歌風と中世仏教　峯村　文人　八七
妙音院師長の音楽と日本音楽史上の位置　榊　泰純　一三三
平曲の成立についての一考察　権藤　円立　一九七
平家物語序章の解釈
——無常と因果との関連——　門前　真一　二一五
芭蕉文学の宗教性　山本　唯一　二四七

『妙好人伝』とその作者たち　佐々木倫生　二八三
漸入仏道集　――翻印及び解説――　高橋　貞一　三一九
筆者紹介　三六八

以上のやうである。こんどの集は、お顔をあはせ、ことばを交した執筆者が七名もあり、眼前にその人の姿が髣髴とし、その声が聞えて来るやうでうれしい。「榊」さんのごとき、神様に関する植物の姓がお坊さんであったり、「倫生」を「みちお」と呼ぶことなど、何回も話しあった間がらだこそいへることである。それにしても、現在京都女子大学助教授である佐々木倫生氏とかつて数年間職場を共にしてゐたことがあったが、氏がこのやうな方面学問をしていらっしゃるとは、まったく知らなかった。とすると、毎日顔をあはせてゐても、その人の学問なり芸術なりは、なかなか理解しがたいものであることがわかる。

「仏教文学研究」も第二集になると、東洋音楽に関する論文が三点もあり　ことに『妙音院師長の音楽と日本音楽史上の位置』は、六四ページにおよぶ力のこもった論である。

論文集には、一人の著者の論著の有する体系をもつのに弱いといふ欠点がある反面、一人の学者では到底考へられない、広く且つ深い学問を一挙に学び得る特色がある。しかも雑誌よりもまとまった深さと大きな量とがある。製本・印刷・用紙などすべて申し分がなく、おち着いた色の函にまで入ってゐるこの二冊の論文集を前にして、その㈢㈣㈤……が陸続と出るのを刮目して待ちたい。そして相愛学園に縁が出来なかったら、おそらくこの本の書評――といふべきでなく、単なる思ひつきであるが――などする機会がなかったであらうと思ふと、そのありがたさを思ひ、それをさう強く感ずるやうになった年齢をも思ふのである。そして、さらに、このすぐれた書が仏教を信ずる人人、日本の文学を愛する人人の机辺を飾り、書架に収められることを思ふのである。

（「仏教文学研究」㈠　昭和三八年一月三〇日刊　定価七〇〇円。「仏教文学研究」㈡　昭和三九年二月二〇日刊　定価九五〇円。ともに発行所は、京都市下京区正面烏丸東　法蔵館である。）